



平成 31 年度 一般選抜入学試験 個別学力試験
出題意図(英語)

(英語)

前期日程

大問 1

・ 出題意図

論理と計算にもとづく従来の意志決定モデルに対する対案としての「直感」にもとづく意志決定の重要性を説く論説文からの出題でした。論理展開と文章全体の趣旨を理解できているかどうか、その土台となる語彙や文法に立脚した個々の文章理解ができているかどうか、そして、それを的確な日本語で記述できているかどうかが見られました。

・ 講評

問 1

the whole thing の中身として、冒頭の 2 つの段落が簡潔に要約できるか、また、myth の中身として、下線部のある段落の次の文から最後までに書かれていることを簡潔に要約できるかがポイントでした。

誤答の中で特に目立ったのは、問題文で求められていることを理解できておらず、the whole thing の内容だけを必要以上に多い語数で説明したり、逆に、なぜ a myth と言っているのかだけを説明している答案でした。また、The whole thing is a myth. を「すべてのことは神話である」とだけ訳して終わっている答案や、「myth＝神話→事実と違う→嘘」という連想を働かせたのか、「すべてのことは嘘／デタラメである」といった文脈にそぐわない答案も目立ちました。また、criterion を critic/criticize と取り違えているものや、methodical を methodological と取り違えているものが目立ちました。challenging を「挑戦的」と訳している答案も少なからずありました。

問 2

イタリックの部分とその後の 2 文の関係が、ある人が自問自答している文脈であると理解できているか、また、Better give the job.... は You'd better give the job.... または It would be better to give the job.... の意味で書かれていると解釈できているか、it working out の主述関係を理解できているか、等を見る問題でした。

上記のポイントを取り違えている誤答や、working を進行形と解釈してしまっている

答案、without some disaster を it working out ではなく imagine にかけて訳している誤答、without 句の中の some を「1 つも～ない」のように訳している誤答、a junior staff を「子どものスタッフ」などと訳している誤答、Better.... 以下を命令文で訳している誤答などが目立ちました。

問 3

「the+比較級」が 3 つ連なった形を、最初の 1 つと後半の 2 つに切って正しく訳せるか、また、action script について、直訳ではなく直前の文脈で説明されている内容を取り込んで適切な日本語で訳せるか、等を見る問題でした。

答案は、上記のポイントを 2 つともおさえてよく出来ている答案と、ポイントを 2 つとも逃している答案の二極に分かれていたようです。また、単語の意味としては、expertise の意味がわからなかったのか「経験」と訳している誤答が目立ちました。

問 4

the intuitive decision maker とはどのようなことができるようになった人のことを指すかについて、本文の後半で説明されている内容を要約した別の英文内の空所に、最も適切な語を選択肢から選んで答える問題でした。

- ① ある似た状況を繰り返し経験することによって、connection が出来上がる過程は、無意識 (unconscious) なものであるため、(イ) が正解。正答率は高かったようです。
- ② connection が出来上がることによってできるようになることは、新たな状況でもそのときに起きていることについての pattern を recognize できるようになるということであるため、(ウ) が正解。ここは、無意識に行うことができる行為について述べているので、(ア) make a decision は間違いですが、これを選んでいる答案もある程度ありました。
- ③ a pattern is a set of cues というくだりから pattern と cue の関係を読み取ることができれば、monitor することができるのは cue であって pattern ではないと判断できるはずですが、(イ) を選んだ誤答が多いようでした。正解は (エ) です。
- ④ 十分な量の action scripts をもつことで、新しい経験と、すでに持っている pattern の蓄積の中から関連するものを照合し、どんな状況でも適切に対応できるようになった人のことを intuitive decision maker とする、と書かれているので、(ア) が正解。正答率は高かったようです。

大問 2

・ 出題意図

教育における遊びの重要性について論じた文章から出題しました。遊びは子どもの成長に大切であるにもかかわらず、標準化されつつある教育のもとで遊びが阻害されてきているという内容ですが、論旨は明快で、身近なテーマであることから、読みやすかったのではないかと思います。

・ 講評（小問ごと）

問 1

下線部の意味を正確に理解し、第 1 段落で述べられている「遊び」の重要性と、それが今日の教育でどのように扱われているかを読み取り、それを限られた解答欄の中に過不足なくまとめることができるかを問う問題でした。

遊びの効用のみに触れた答案が目立ちましたが、「悲劇」だと言っているのは、その遊びが教育の現場で軽視されているからです。その点も言及する必要があります。単語の意味を取り違えた答案も少なからずありました。例えば、**serious business** を「真剣な事業（ビジネス）」としてみたり、**trivial** を **tribal** と間違えたのか「部族の」としてみたり、**play** を「演劇」や「運動」としたものもありました。

問 2

下線部訳の問題には、語彙、文法、構文上のポイントがあり、答案を書くときにはそれを外してはいけません。ここでは、**not only ~ but** の倒置、**otherwise** と **would** の理解と訳出、そして、**intruded** や **eating into time** などが正確に訳されているかというのがポイントです。

さすがに、**not only ~ but** の構文はほとんどの受験生が見抜いていたようです。しかし、**grown longer** を「成長する」や **eating into** を「食事をする」と誤読したり、**intrude** や **ever more** の **ever** を理解できていないと思われる答案もありました。最後の **that would otherwise be available for play**（もしそうでなければ、遊びに使えるであろう時間）の部分に正確に訳している受験生はやや少なかったという印象があります。

問 3

この箇所ポイントは、**no amount of toys we buy or 'quality time' or special training we give our children** の箇所を全体の中でどのように訳していくか、また 2 つある **or** がどのようなつながり方をしているかという点です。とくに、**Nothing that we do** の部分とどのようにつなげていくかが重要です。

主部の **Nothing that we do** と述部の **can compensate for the freedom** の間に **no amount of ~** が挿入されているため、全体として否定の意味である英文の骨子をつかめ

ていない答案が目立ちました。また、**no amount of** を単なる否定表現と考え、「おもちゃを買わない」「子どもたちに質の高い時間を与えない」と誤訳したり、**Nothing that we do** の部分を「私たちは何もしないこと」と名詞節の **that we do nothing** のように解釈している答案が驚くほど多かったです。この箇所については、関係節構造と名詞節の区別ができていないのではないかと思われました。

問 4

空所の前後の文章の流れから、教育標準化の動きが学校での遊ぶ機会を減らしていることが読み取れるかの問題でした。この点をつかんでいれば、選択肢(ウ)を選ぶことは比較的容易だったと思います。印象としては、60%くらいの正解率で、誤答としては(イ)と(エ)が目立ちました。

問 5

文章全体の流れ（特に、その前の部分 **If your shoes hurt,...** と呼応していること）に目を配ることも大切ですが、こういった問題は選択肢の中の代名詞や冠詞などに注目し、そのロジックの流れを理解すると簡単に解くことができます。(ア)の **it** と **them** が(イ)の **the system** と **the people** を指していることを見抜けば、まず(イ)→(ア)となります。次に、(ウ)の **the change** に定冠詞 **the** がついていることから、これは(ア)の **to change it** の部分を指していることがわかれば(ア)→(ウ)となるので、正解は(イ)→(ア)→(ウ)となります。正答率はそれほど高くなく、(イ)→(ウ)→(ア)という誤答が目立ちました。

大問 3

・ 出題意図

大学のディベートの授業で **Communication technology has left us more isolated.** という命題について学生チームが議論する形式の文章です。**Team Red** はこのテーマに賛成、**Team Blue** は反対という設定です。受験生がこのディベートの内容を正確に理解するかどうか、そして、**Team Blue captain** として **Communication technology has *not* left us more isolated** という立場で、適切な文法、表現で意見を表明できるかを見る問題でした。

・ 講評

問 1

文章の内容を把握した上で、(1)～(5)の選択肢の意味がきちんと理解できるかどうかを見る問題でした。正解は(2)と(4)です。(1)を選んだ受験生は **annually** という意味が理解出来ていないと思われます。(3)は **Prof. Jones** の意見ではありません。また、(5)については、**CNN** は **teenagers spend 9 hours on their smartphone everyday** と言っています

が、spending 9 hours a day on your smartphone is *an unusual way to live* とまでは述べていません。正答率は高かったようです。

問2

受験生がディベート全体の内容と Team Red captain の主張を理解できているか、Team Blue captain として Team Red captain に対する反対意見を書けるかどうかを見る問題でした。また、受験生が適切な文法、表現、構文で書けるかも評価しました。

高得点を得た答えは適切な文法及び表現で Team Blue captain の意見 (giving at least two reasons) が過不足なく書けているものでした。一部の答えには Team Blue captain としてではなく、Team Red 側の主張に賛同する答えを書いたものや、自分の SNS の習慣など、ディベートの内容には関係ないことを述べているものもありました。

大問 4

・ 出題意図

現代社会を生きるために必要な素養をテーマにした随筆を題材として、元々の日本語の意味を理解した上で、それを自分の語彙を使ってうまく、適切に英語で表現できるかどうかを見る問題でした。

・ 講評

(A)

「前者/後者」を the former/the latter を使って訳せるか。いずれも「能力」のことを言っているので、原文にはなくとも英訳の際には The former is the ability to gain …と ability を補って訳せるかどうか。また、「同居している」は比喻なので直訳ではなく意味をくみ取った訳出ができるか、等を見る問題でした。しかし、実際の答えには、「前者/後者」を first, second のように訳しているものや、両者ともに「能力」ではなく「人」であると取って the former type of people のように訳している答えがかなりの数ありました。また、「受動的に」を passively を使って訳している答えは少ない印象でした。「同居している」は、live で訳している答えや、そもそもここを訳していない答えが目立ちました。語の取り違えとしては、invent を invest, latter を later とするミスが多く、スペルミスとしては、former を farmer、person を parson としている答えが多かったようです。

(B)

「飛び抜けて優秀な」「能力の持ち主があらわれた」「グライダー専業」「安心していられない」といった日本語を適切な英語に訳せるかどうかを見る問題でした。特に、「持ち主があらわれた」「グライダー専業」は、ここでは比喻を含む上、後者の複合語

は文脈に現れている筆者の意図をくみ取らないといけないのですが、文脈上の意味や比喩が理解できないためか、適切な英語に訳せていない答案が一定数ありました。例えば、「グライダー産業で働いていては未来がない」とか「自分で翔べない人間」＝「グライダー能力がない人間」と取り違えている英訳が一定数ありました。また、意外にも、themselves の意味で theirselves と書いている答案が半数くらいあり、主語名詞と動詞の一致ができていない英訳も 7 割程度ありました。高等学校までに、英文法の基礎をしっかりと身につけるだけでなく、日本語の正確な読解能力も育成してほしいと思います。

大問 1

・出題意図

人は音や色をどのように知覚するかについて書かれた英文でした。第 1 段落から第 5 段落までは音の知覚について、第 6 段落と第 7 段落が色の知覚について、そして、第 8 段落から最後までが両方に共通する知覚のメカニズムについて書かれていました。この文章構成をしっかり理解できていれば、細かな点で分からない部分が多少あっても、文章全体の主旨は理解できると思います。

・講評

問 1

文章の前半部分である 5 段落目までに書かれている内容を適確にまとめることができるかがポイントでした。特に、1) 木が倒れること自体が音を作り出すわけではないこと、2) 空気圧の変化を感知する身体メカニズム、3) 木が倒れる出来事として解釈する脳の働きの 3 つのポイントに言及されているかを採点基準としました。

これら 3 つの点について全て書かれている答えは 1/3 程でした。また、上記のポイントから外れて、後半部分に書かれている「色」に関する内容を書いている答案もありました。90 字以内の長い日本語を書かせる問題でしたが、日本語として読みやすく書かれている答案は少なく、書かれている内容が不明瞭な答案が多くありました。

問 2

文法的にはさほど難しい箇所はありませんが、知らない意味の単語を全体の主旨から類推できるかがポイントでした。具体的には、1) with 句の解釈 (with+名詞+補語で付帯状況を表す)、2) not a done deal の意味、3) 不定詞句の解釈 (目的を表す副詞的用法) ができているかを採点基準としました。

不定詞句の解釈は良くできていましたが、not a done deal の解釈があまりできていませんでした。この言葉の意味を知らなくとも、音について書かれていた前半部分の第 4 段落の最初に書かれている文 ‘Even after the brain receives these electrical signals, its task is not complete.’ が同じ趣旨の内容を述べていることに気付けば、そこから意味を類推することができます。

問 3

難しい単語はありませんが、長い英文を分かりやすい日本文で訳すことができるかがポイントでした。具体的には、1) but 以下の文における主語 the information required for you to experience color を正しく解釈しているか、また、2) 最後の過去分詞 corrected

by the light that your brain takes in from the world が修飾している要素を正しく解釈しているかを採点基準としました。

1 点目については、「あなたが経験した色の情報」「経験するよう要求する情報」「経験することを必要とされる情報」などと誤訳している答案が多く見られました。2 点目については、直前のコンマと本文の主旨から判断すると、**predictions** ではなく、**information** を修飾していると考えられます。残念ながら、この点を分かりやすい日本語で訳している答案はほとんどありませんでした。

問 4

代用表現の **do it** が示す意味を適確に理解しているかを問う問題でした。問題の **do it** が指す箇所は、同じ段落の 1 文目 ‘**With prediction, you can “see” color in your mind’s eye on demand.**’ です。但し、注意しなければいけない点は、動詞 **see** に引用句が付けられている点です。この場合、森の木々の色を実際に見るのではなく、「心の中で想像する」ことを意味すると考えられます。このポイントがはっきりと書かれている答案は、全体の半分ほどでした。

問 5

直前の **To believe otherwise is naive realism,...** を手がかりに、語句を選ぶ問題でした。**naive realism** の意味を知らなくとも、**to believe otherwise** から、**as if** 以下には著者が考えている **perceptions** の内容とは逆の内容が続くことになります。選択肢の中で、本文の内容と明らかに逆の内容が書かれているのは(イ)です。正解率は 1/3 程でした。

大問 2

・ 出題意図

キーボード入力が普及した時代において、従来の手書きの必要性について様々な意見が紹介されている文章です。議論自体に難解さはありませんが、様々な意見が次々と登場することにとまどった受験生も少なからずいたかもしれません。さまざまな議論が紹介される中でも、とくに手書きの必要性を擁護する点に中心が置かれていることに読みながら気づくことができたかどうか、そして、文脈のなかで文法知識や語彙力を活用できたかどうかを問いました。

・ 講評

問 1

語数の多いセンテンスですが、**Given that ... , and that ... , “cursive” writing ... has been dropped** の構造が理解できるか、そして **Given that** の意味を正しく理解しているかを問いました。正解は (エ) ですが、誤答では (ア) が多数を占めました。

問2

まず、主語の **It** は、その前のセンテンスにある **press the right key** を指すことを理解しているかを問いました。この点については大多数の受験生が正しく理解していました。しかし、**above all** の意味、**the letter** の意味、**whatever the letter** の正確な理解の三点で苦心した答案が多く見られたため、全体としては得点が予想外に低かった問題でした。**above all** では、逆接接続詞 **but** 以下ではキーボード入力の弊害が述べられている点に気づくことが重要です。**the letter** は「手紙」ではなく、「文字 (アルファベット)」を意味します。**whatever** は、**whatever the letter (is)** と **be** 動詞が省略された形であることを見抜く必要があります。

問3

文章中で選んだ4つの単語と選択肢で使った16の単語は、どれも学术论文では頻出度の高い語ですから、本学を受験する方には是非知っておいて欲しいと思います。正解は、① (ア) ② (エ) ③ (ウ) ④ (エ) です。仮に単語の意味が分からなくても、文脈から意味を類推できるかどうかも大切です。例えば、(2)の **singular** を知らなくても、このセンテンス全体の構造が、**handwriting/typing** を対比していることがヒントになります。(3)も、このセンテンスと次のセンテンスがデジタル化を支持する内容が書かれていることがヒントになります。(4)は正答率が低かったのですが、ここでの **draw** は「絵を描く」の意味ではないことには気がついてもらいたいです。選択肢では (ア) がまぎらわしかったかも知れませんが、このセンテンスの主語である **we** にあたる人たちは研究者ではなく、教育行政の人であることが分かれば、消去できるはずです。

問4

かなり手こずったような印象を受けました。もっとも目立ったのは、**desirable difficulty** が、手書きの際の脳の認知的活動を指すことを理解できていない答案です。そういう答案では、キーボードによる入力について書いていました。あるいは、設問とは無関係なこと、論理が飛躍したことを書いた答案 (例:「現代社会の利便さがかえって悪い影響を及ぼしている」) も散見されました。**difficulty** を **difference** と読んでしまった答案が多かったのは残念でした。

この問題では、**desirable difficulty** という抽象的な言い回しを、具体的に説明できるかどうかを試しました。ですから、**difficulty** が何を指し、なぜそれが **desirable** なのかを具体的に述べている箇所を特定したうえで、設問の条件にしたがって答える必要があります。

問5

問題文中に登場する人物の主張を理解した上で、当該人物の主張をサポートするよう

な具体例を書けるかどうかを見ました。さらに、設問の指示では、問題文中で使われた手書きの効用の例を使ってはいけないとあるので、答案を書く前に、問題文全体を見て、すでに文中で使われた例を把握しておく必要があります。

50～80 words という語数はけっして多いとは言えませんが、普段からまとまりのある英語を書いていないと、難しく感じたかも知れません。出来は芳しいものではありませんでした。何を問われているか（何を書けばいいのか）がわかっていないような答案が意外に多くありました。他にも、不必要なことを書いたために減点せざるを得ない答案も多数ありました。英語を書く際の「パラグラフ」は、日本語の「段落」とは違います。英語のパラグラフとは、目的を持った、センテンスの集合体です。ですから、手書きの利点・価値・必要性などと直接関係のないことを書いてしまうと、パラグラフではなくなってしまいます。

大問 3

・ 出題意図

働き方の改革をテーマにした文章を題材として、元々の日本語の意味を理解した上で、それを自分の語彙を使ってうまく、適切に英語で表現できるかどうかを見る問題でした。

・ 講評

(A)

特に、「仕事一辺倒」、「長時間の残業を返上したりして」「ゆっくりながら確実に増えている」という日本語の表現をどのように英語で作文するか、また長い問題文をどのように英文として構成するかがポイントでした。

increase や bring up, work overtime などの単語の用法が誤っている答案が多くありました。また元の文の構成が十分理解できていないままだらだらと英文を書いてしまっているような答案もありました。まずは日本語をしっかりと理解した上で自分なりの英語で表現しようとする姿勢が大切です。

(B)

特に、「人間関係が希薄になって」、「町内の共同業務や助け合い」という日本語の表現をどのように英語で作文するか、また「長くなればなるほど～少なくなり」を高校までに学習した文法事項（the+比較級, the+比較級や接続詞 as）を用いて作文できるかどうかポイントでした。

多くの受験生が「the+比較級, the+比較級」の構文を用いていましたが、the more time they spend working とすべきところを、the more they spend time working のようにしている受験生がかなりの数いました。これは、the more, the more などと形式的に覚えていた表現をそのまま英文で使ってしまったためだと思われます。また、the longer を

the more long としたり、less と fewer を混同するなどの誤りも見られました。構文や語法についての基本的な知識を身に付けることが大切です。

○志願者へのメッセージ

本学の長文問題の最近の出題傾向は、分量は比較的多いものの、内容的には読みやすいものになっています。つまり、専門性や抽象度の高い問題は少なくなっており、標準的な語彙力があれば内容を理解できるレベルの文章が選ばれています。そこで、一定量の英文をできるだけ多く、あまり細かなことは気にせず、全体の内容をつかむという訓練が推奨されます。そして、同時に、細かな点にも注意して正確に読み、理解するという訓練も必要です。

「なんとなくわかった」というのと、正確に読み解くこととは違います。もちろん、一文一文を訳していく必要はないでしょうが、英文の内容を自分のことばでまとめてみたり、少し難しそうな英文はしっかりと日本語に訳してみるという癖をつけることも必要でしょう。

いわゆる四技能を重視する英語教育の結果、英語によるコミュニケーション能力は以前に比べて伸びてきているのかもしれませんが、しかし、外国語である英語で書かれた文章を正確に読み、自分の考えを正しい英語で論理的に表現するという点もおろそかにしてはいけません。そして、今回、答案を見ていて、内容説明や要約問題でそれを表現する国語力に問題があるのではないかと強く感じました。英文の内容、そして問題のポイントをつかむことができても、答案を適切に作成するための表現力が十分でなければ得点につながりません。過不足なく答案を書くという技術は、たとえ母語であっても簡単ではありません。日頃の訓練がものをいいます。要は、母語であれ、外国語であれ、ことばを大切にする読み方、書き方ができるかという点を十分に訓練してほしいと思います。

ことばによる表現には、丁寧に書く、誤字脱字をしない（英語であればスペルミスをしない）など基本的な注意事項の他に、文法・論理・修辞という点があります。英語作文の場合は、修辞（レトリック）という点は受験生には要求されないにしても、文法的ミスをしないことや（例えば、主語が三人称単数で現在時制の際は動詞に s をつけるといった初歩的な点）、論理的な展開にも注意してほしいと思います。そのためにも、英語以前の問題として、ふだんから日本語による表現をする際にも、こういった点を十分に注意してほしいと思います。